

力ント照らした道
転換点迎える今
若い人に伝えたい

敗戦を告げる玉音放送から70年7カ月と14日。月刊「PLAYBOY」など雑誌編集の最前線で大衆と向き合い、18世紀ドイツの哲学者、カントの名著「永遠平和のために」の新訳本を世に送った編集者は何を見てきたのか。今、何を語るのか。戦後の安全保障政策を転換する安保法が施行される29日。その言葉に耳を傾けた。

「永遠平和のために」が今、読み
れているのですね。

「カントの著作を、ドイツ文学
者の池内紀さんにわかりやすい言
葉で抄訳してもらい、2007年
に出版しました。以後、絶版のよ
うな状態でしたが、安保法案が話
題になっていた去年6月に復刊さ
れました。じわじわ売れて3刷に
なったそうです」

——積極的平和主義を掲げる安

倍音二首組にも、せら読んじな
いぢやね。

復刊直後の7月15日、安保法案が衆院の委員会を通過した夜のことです。池内さんと私、担当編集者

の3人で、東京・赤坂のそば屋で食事をしました。周囲には黒塗りの車がとまり、報道陣も集まつていました。店に安倍さんがいたん

です。この本は彼にこそ読んでは
しいと語っていたので、おがみさ
んを介して差し上げました。これ

な偶然って、あるんですね」

「平和への歩みは遅々としているけれども、いつか永遠の平和が実現するのを期待して歩む」とが

大事なんだ」とカントは書いています。人類の歴史は戦争の歴史だからこそ戦争のない社会を、と理想を掲げたんですね。繋り合った

人々が平和に暮らしているのは、人間にとつて『自然な状態』ではなく、敵意で苛かされているのが

「自然な状態」である。だからこそ、平和状態を根づかせなければならぬ、と。共通の敵でもない

別の国を攻撃するために軍隊を出
國に貸す(レンタル)があつてはならな
い、とも書いています。まさに軍
隊を出借するのではありません。

——戦後日本の安保政策の転換点になります。

は一度も戦争をしなかつた。カン
トが熙らした道を世界で最も忠実
にたどったのは歴後の日本ぢよ

いけ たかあき 池 孝晃さん

1939年生まれ。62年集英社入社。78~82年まで「PLAYBOY」日本版編集長。文芸出版部取締役を経て、綜合社（当時）社長。2007年退職。

たのを覚えていります。こんな闘いの先に、どんな夢や希望があるのか、僕にはさっぱり理解できなかつた

たようだ。86年、僕は46歳で書籍編集へ移り、母がたつた欧洲の作家の翻訳書を手がけます。フルリストやジョイスなど)です。政治的な闘争に参加するより、本を読んでいたいというクチなので楽しめたですね」



10

理性とユーモア 本質突く

上智大学教授 寺田 俊郎さん

検閲を復活させるなど政治的な圧力がかかる中でのことでした。平和を唱えることはおのずと時の為政者との対決を意味します。それでも、ユーモアや諧謔のオブラーントに包みながら、巧みに、鋭く本質を突く言説を展開したのです。「政治家たちは、哲学者は夢のような」とばかり言う、とバカにしている。だから、私が夢のようなことを言つても目くじらを立てないでもらいたい」と皮肉を込めた言葉も残しています。

この本は、いわした戦乱期を生き抜いた老哲学者が、平和に向けた提案を世に問うたものです。理性によって考える道筋をつくったカント哲学の集成、思索の結晶と言つていいでしよう。

の心の著作です。

1724年生まれのカントが生きた18世紀は戦争が絶えませんでした。オーストリアがフランス、スペイン、スウェーデン、ロシアと結び、フロイセン、イギリスと戦った七年戦争など、ヨーロッパのほぼすべての国が戦争と関わる、時々死に死者が増えていくような時代でした。カントの言葉を借りれば、平和があるといわねば「墓場の平和」だと思われるような時代です。